

# 海外での感染症に注意

## 徳島大学病院 東医師に聞く

海外旅行や留学、ビジネスで衛生環境が整わない国を訪れると、思わぬ感染症にかかる恐れがある。そこで予防策となるのが渡航前のワクチン接種だ。徳島大

学病院は、2016年12月に「渡航外来」を開設し、予防接種や相談を受け付けている。感染制御部副部長の東桃代医師に注意点を聞いた。(山口和也)

### 海外でかかりやすい感染症(※は輸入ワクチン)

種類	主な症状	接種回数	主な流行地域
狂犬病	水を怖がる、けいれん	※3回	南アジア、アフリカ、中国
A型肝炎	発熱、黄疸、倦怠感	※2回	南アジア、アフリカ
B型肝炎	発熱、黄疸、倦怠感	3回	東南アジア、中国
破傷風	口が開かない、けいれん	3回	世界中(特に発展途上国)
腸チフス	発熱、腹痛	※2回	南・中央・東南アジア
日本脳炎	発熱、意識障害	3回	東南アジア・南アジア
マラリア	発熱、悪寒	予防薬	熱帯・亜熱帯地域

### 渡航外来は保険対象外

渡航外来は、医療保険の対象にならない自費診療となる。徳島大学病院では、診療料5400円(2回目以降は1728円)のほか、ワクチンや予防薬の費用がかかる。狂犬病は、国産よりも即効性がある輸入ワクチンが1本当たり9612円。1回目を接種してから、1週間後と3〜4週間後の計3回受ける必要がある。B型肝炎ワクチンは2808円、破傷風ワクチンは972円となっている。

渡航外来は予約制で、診療時間は毎週金曜の午後2〜4時。問い合わせは同病院感染制御部(電088(6333)9629)。

# 事前にワクチン接種を

国内では根絶された感染症が、海外では依然として流行している。ケースは珍しくない。例えば、狂犬病は国内では1957年以降、人も動物も発症例がない。しかし、世界保健機関(WHO)の推計では、世界で年間5万人以上が亡くなっている。

狂犬病は、発症すると致死率がほぼ100%の危険な感染症だ。日本人は、70年にネパールで1人、06年にフィリピンで2人が感染し、いずれも死亡している。

渡航外来で感染症の注意点を説明する東医師(左)と患者(右)。

徳島大学病院

## 免疫力つくには期間必要

いる。狂犬病の疑いがある犬や猫、コウモリなどにかまれたら、発症する前に現地の信頼できる病院でワクチン接種を受ける必要がある。感染のリスクが高いアジアやアフリカを訪れる人は、渡航前にワクチンを接種しておく、より確実に予防できる。

このほか、渡航前に接種できる主なワクチンは、飲食物から経口感染するA型肝炎や性行為などで感染するB型肝炎、傷口から感染する破傷風がある。蚊を媒介するマラリア

アの予防は内服薬を使用。短期、長期滞在それぞれに適した2種類があり、渡航の2週間前から服用を始める。南米などの標高が高い地域を訪れる際は、高山病に効く薬も処方しているの携帯しておく安心だ。

徳島県内では、毎年約5万人が旅行や留学、海外赴任などで海外に渡航している。東医師は「ワクチンを接種して免疫力をつけるのに一定期間が必要。できるだけ早めに受診してほしい」と呼び掛けている。